

能 勢 町

能勢町観光物産センター「道の駅 能勢（くりの郷）」
を核としたまちおこし

はじめに

能勢町は、大阪府の最北端に位置し、町面積の約85%を森林と農地が占め、四方を北摂山系に抱かれた里山の町です。本町では昔から、米・寒天・凍み豆腐、栗・黒牛・炭の生産が行われ「三白三黒」として大切に受け継がれてきました。

能勢町農産物直販協議会の設立へ

稲作を中心とする兼業農家が多い本町では、自家用に栽培した農産物を行楽客に販売しようと、道路沿いに百円市や無人市が出来始め、そこに都市住民と農家との交流が生まれるようになりました。そしてこれは農産物の販売という経済効果のみならず、お年寄りの交流の場、生きがいとして広く町内に根付いていくこととなりました。

平成11年には、翌年にオープンを控えた能勢町観光物産センターへの出荷者組織として、能勢町農産物直販協議会が35名の会員により組織されました。

能勢町観光物産センターのオープン

農林水産省の構造改善事業の採択を受け、平成9年から平成11年の3年間で整備を進めてきた能勢町観光物産センター「道の駅 能勢（くりの郷）」が平成12年5月にオープンしました。オープン当時の出荷者は77名と会員数こそ設立時の倍になったものの、140㎡の常設売場を埋めるには、あまりにも品不足であることから売上が伸びず、運営会社である（有）能勢物産センターは、設立と同時に厳しい経営状況となりました。



能勢産の「新鮮」「安心」「安全」な農産物を消費者へ

観光物産センターは、能勢産農産物の委託販売を基本とするため、農家の出荷がなければ商売になりません。経営の苦しさが見込まれましたが、能勢の農産物を求めて遠方から毎週来られるご夫婦や毎日コツコツと出荷される生産者の姿を見ると、能勢産にこだわり、新鮮で安心できる農産物を消費者に提供することが大切との思いから、出荷農家や大阪府の普及員さんの力を借りながら「能勢産」にこだわり続けてきました。



そして、観光物産センターへの出荷量が増えるにつれ、一時は減少の一途を辿っていた「三白三黒」のひとつでもある、栗の生産量も少しずつ増えてきました。

さらなる地域の活性化に向けて

平成20年3月末の直販協議会の会員数は、320名となり設立時の約9倍、観光物産センターの販売金額もオープン時の3.5倍を超え、土日を中心に年間30万人を越える人で賑わっています。そして、消費者に安心して農産物を購入していただけるよう、トレーサビリティ（栽培履歴記帳）にも取り組んでいます。

また、観光物産センター内には、町内の観光案内や観光ボランティアガイドの受付業務を行う観光案内所、国及び府の無形民族文化財に指定されている「能勢の浄瑠璃」を上演する舞台も設置しており、本町の情報発信機能を担っています。

運営主体の（有）能勢物産センターでは、都市と農村の交流に重点を置き、平成18年から吹田市青山台の商店会で週に一度、アンテナショップを実施しています。19年度からは大阪府の支援を受け、吹田市や商店会と「のせ・あおやま元気街道推進協議会」を設置して、交流事業を実施しており、野菜の植付けや、収穫体験、加工講習会等を通じて都市住民との交流の輪が広がっています。

本年4月にオープンした増築店舗を含め350㎡の売場には、農家の方が丹精を込めて栽培した「能勢産」の農産物が並んでおり、これからも、脈々と受け継がれてきた「土」と「水」と「空気」を大切に守りながら、次の世代へ引き継いでいきたいと考えています。